

多摩デポ通信 第50号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2019年4月27日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP <https://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

通常総会及び

記念講演会

へのお誘い

また年度総会の時期がやってきました。発足し12年目を迎えます。東京都立図書館の大量廃棄問題に端を発し、都の再考を迫る中から、市町村立図書館自身の問題にも気づき、自らやれることを積み上げつつ東京都へ協働も求めていこうと「共同保存図書館」を構想し運動を続けてきました。まだリアル共同保存の端緒はつかめませんが、今号3ページの調査報告でお伝

えするように、多摩地域の多くの図書館は既に私達が開発したTAMALAS個別処理システムを（自館が除籍をする時に）（多摩地域の他自治体の所蔵状況を知るために）活用し始めています。時代的に、蔵書を図書館同士で貸し借りする検索手段として発想された都の統合検索とは違った、他自治体を調べる流れが定着しつつあるのです。

2018年度には私達はTAMALASの一括処理システムも発表しました。両システムの普及を図り改良しつつ、利用者への提供のために共同保存を志向す

会員の方、2019年度総会と記念講演会に参加してください！

5月19日(日)午後2時～4時40分
国分寺労政会館 第3会議室（3階）
午後2時～3時 通常総会
3時20分～4時40分 記念講演会



講演「私が出版ニュース社でやってきたこと」：清田義昭氏

（出版ニュース社代表、多摩デポ副理事長）

——5時からは場所を移して、懇親会（おでん屋）



る市町村の図書館と連携したNPOの活動を続け、何とかリアルな共同保存の仕組みを生み出していききたいと考えています。

一方で、8ページに書きましたように、資金のたくわえが枯渇し会員数が漸減するなど、私達の活動を続ける上での困難も見えてきました。会員の皆様はぜひ「総会議案書」をお読みになり、5月19日の総会にもお集まりください。ご一緒に運動の次の展望を話し合いたいと考えています。新年度もよろしくお願いたします。

総会後の 記念講演は清田さん

『出版ニュース』を50年間発行しながら、何を見、何をし、何を考えてきたか？

清田義昭さんにこのタイミングで講演依頼しました。清田さんは出版ニュース社代表ですが、「多摩デポ」では創立以来の理事、さらには平山恵三氏が退任されてからは副理事長として、理事会の議論に加わり、あるいは講座や総会の席にも座っておいでになる方です。

清田さんが50年間関わり、30年近くは編集長でもある『出版ニュース』が3月末で休刊となりました。実に創刊以来69年と半年間続いていた旬刊誌です。

同誌を休みなく発行し、単行本も出し、年一冊は『出版年鑑』を出しながら、清田さんは日本の出版、出版

流通、書店、読書、そして図書館の世界を見てこられました。時々取材し、同誌を通じてアピールし、人に書かせ、役職にも就いて意見を表明されてきました。清田さんは何を見、何をし、何を考えてきたのか。出版界はどういう世界なのか。日本の出版物、本の世界はこれからどうなるのか。それは図書館の世界にも、私達の読書にも地続きの話だと思えます。ぜひ今のお考えを伺いましょう。

図書館界にとって、『出版年鑑』が出なくなり『出版ニュース』がなくなること、はとても大きなこと。これからは（仕事の元手である）出版物の世界を全体として俯瞰する情報を、図書館の人間はどこで手に入ればいいのでしょうか？出版、流通、書店業界にとり専門メディアがなくなるのはもちろん大きな痛手

□ 今号の内容 □

- ・ 通常総会及び記念講演会へのお誘い
- ・ 「TAMALAS 個別処理システムの活用に関する調査」報告
- ・ 第35回多摩デポ講座実施報告
 - ・ 参加者の感想
(古川尚子・港山敦子)
- ・ 多摩デポブックレット第13号の発行と送付のお知らせ
- ・ 財政難と会費納入、ご寄付のお願い

会員の皆様、総会にお集まりください。
記念講演会にもぜひ。
欠席の方は必ず
委任状の提出を
お願いします

ですが、個々の新刊書の発行情報だけだったら、今は代替物はあるのです。

TAMALASは

各自治体で実際どのくらい使われているのか？

「TAMALAS個別処理システムの活用に関する調査」を行いました

多摩デポでは2016年からTAMALAS（多摩地域公共図書館所蔵確認システム）の個別処理システムを運用しています。多摩デポHPにある検索窓に、任意の図書（ISBN（国際標準図書記号）の数字を入れれば、多摩の各自治体の所蔵冊数が即座に確認できます。各図書館が除籍などをする時にはまずこれで調べ、多摩地域での希少性を確認しましょうと提唱しているツールです。

システムの発表後、地域毎に図書館向け説明会を行ったり、館長会の場でも紹介してきましたが、活用の

実態がわかりません。そこで全自治体に調査を行いました。29自治体にある公立図書館の中央館（中心館）に、その自治体のTAMALAS個別処理システムの活用実態と評価、要望・疑問を伺い、システム改善につなげたいというものです。館長協議会の協力を得て、調査内容は館長協議会事務局から一括して配布してもらいました。回答期限は3月1日から15日でしたが、ようやくほぼ全ての自治体の回答が揃いました。整理と分析をしているところで、協力していただいた各図書館にまず感謝します。

そこから見えてきたこと

約35%の図書館が「よく活用している」、同じくらしいの図書館が「たまに活用している」、約30%が「活用していない」というお答

えです。「活用していない」理由では「都立図書館統合検索に慣れている」「23区の所蔵状況も知りたい」「除籍検討に際し、すべての資料につき多摩地域の所蔵状況を確認する余裕がない」などがあります。

ただしまだ「知らない」との回答も2自治体からありました。

全体としては、多摩地域ではTAMALASは知られるようになり（認識は自治体によってかなり違いがありますが）ある程度は実際に使われていると言つてよさそうです。

感想・質問・要望について

「検索が早くデザインも見やすい」「新バージョンでは書名も明示されてよい」と高評価がある一方、「最終結果が出るまでには都立よりも時間がかかる」

「タイムアウトになる館は特定の2〜3館のような気がする、自治体のサーバの問題か？」「アイコンの意味がとりにくい」といった指摘もありました。

書かれた要望について、すぐ直せる部分は直しながら、質問内容と回答は公表していく予定です。

「TAMALAS一括処理システム」の活用予定は？

昨年の運用開始から、3自治体の活用（ID、パスワード発行）に留まっている一括処理システムですが、80%の館は「知つて」おり、活用を検討中の館もあることがわかりました。

調査結果の詳細は現在まとめの作業を進めていますので、まとも次第各館にご報告させていただく予定です

「オープンブックカメラ
を使った書誌情報作成と
書誌同定のしくみ」

新開発の装置を持参し、
説明役に三者に集まっても
らう講座を小平市中央図書
館の視聴覚室で行った。

多摩デポの共同研究のパー
ートナー、(株)カーリルの
吉本氏が開発して昨年発表
した、本の書影に特化した
撮影装置の説明・実演と、
それを未整理のまままっ
ていた非刊行資料等の整理
に活用した専門図書館の経
過説明。そして整理作業に
協力し記録された書影画像
からOCR(光学的文字読
取)装置でタイトル等の文
字情報を取り出して目録の
自動作成を行ってみた図書
館支援企業の技術的説明で
ある。

開催は3月22日(金)午

後1時30分から5時。講師
は、(一般財団法人)機械振
興協会建材研究所BICラ
イブラリの結城智里氏、
(株)ブレインテックの関
乃里子氏、(株)カーリルの
吉本龍司氏。参加は23人(う
ち会員外は9人)だった。
参加はそれ程多くなかつた
が、現役図書館員、図書館
退職組ばかりでなく、(ミニ
コミ収集・整理や手作りの
図書館的活動をしていて)
実践的にも興味を示す市民
も来られていた。

まず印象的だったのは、
最初に発言した吉本氏の
「こういう機能のカメラを
開発したから使い方をみん
なで考えて」という姿勢。
結城氏からは普段あまり
聞けない専門図書館の運営
基盤の厳しさとその中での
職員の努力が聞けた。もし
て未整理の非刊行資料のヤ
マの整理に、このカメラを
使ってとりあえず取り組も

うという姿勢(どの図書館
にもこの宿題はありそう)。
そして関氏からは、元々
OCR用に書かれていない
デザイン性の高い表紙文字
の機械認識の現状での精度
の報告が興味深かった。

参加したある市民はメー
リングリストに、「何といっ
ても、表紙、裏表紙、背表
紙、写り込むバーコード、
厚さなどいっぺんで記録で
きるところがすごい」、「あ
くまでも書画カメラという
性能の割り切り方が示唆に
富む」、実証実験に対しては
「OCRの読取を(あくま
でも手で直さない)実験の
前提に感心した、という印
象的な感想を寄せていた。
なお現役図書館員2名に書
いてももらった感想を次ペー
ジから掲載した。

多摩デポ側からは最後に
「この機器を書誌割れして
いる広域的地域資料の同定
識別に役立てられないかと

注目している」と提起した
が、短い時間で、一回だけ
ではそこまでは議論を深め
られなかった。
参加者には持ちかえって、
それぞれに今後のヒントに
なることがある内容だった
のではないかと思われた。
会場を提供していただいた
小平市中央図書館のご協
力に感謝いたします。



なんか面白いことが
始まりそう、と。

——講座参加感想

古川尚子

多摩デポ講座に初めて参加させていただきました。何よりタイトルに惹かれました。

「オーブンブックカメラ」とはなんぞや？本の表紙裏表紙、背の画像を撮影して書誌作成に利用するらしい。なんか面白いことが始まりそう。そんな期待を持って参加しました。

本の表紙画像を表示するというのはインターネットの書店サイト等ではよく見かけますし、自館でもシステムリプレイス時に蔵書検索の結果にグーグルの資料画像を表示させようという計画もありましたので、そんなに珍しいことではないのですが、本の背の画像を

同時に撮影して利用するのは今までなかったように思います。

職場である市立図書館では、「〇〇の本が見当たりません。一緒に探してください。」と応援要請が入ることもしよつちゆうです。返却日やどの端末を通ったのかなどで、配架前のブックトラックなどで見つかることも多いのですが、正しい棚に並んでいたのにつけられないこともあります。これは意外に背に書かれているタイトルがデザインの関係などで書誌データと違って見えるケースがあるからでしょう。スタツフや利用者からも本の背画像があれば自分でも探せたのに：！と悔しがられる経験を何度もしています。また、（本来あつては困るのですが）分類間違いで誤配架された本を発見するには背の分類ラベルと本の大きさ、

ページ数を頼りにするしかないのですが、これにインターネット上にある本の画像データから、装丁の文字や本の色などを搜索の材料として追加すると発見率を上げることが出来ます。このような経験をしているため、本の背画像が公開されていけば、図書館や書店で欲しい本を探すのに役立てられそうな気がします。

実際に報告されたのは未整理資料を今回開発されたオーブンブックカメラで撮影し、そこから読み取れる文字情報を書誌として作成するという実験でした。書影としてブックカバーの3方向を一度に撮影してしまっています。その時間はほんの一瞬です。また、実験は想像していたより一歩先でした。なるほど、OCRの技術で書誌データ化までしてしまうのかと驚きました。

参加していた図書館関係



者からは「書誌の正しさ」についての疑問がすぐさま上がりましました。対応策で奥付を撮影しておいて欲しいと：。確かにこのままでは公立図書館がOPACに公開するのは難しいでしょう。（株）ブレインテックの担当の方は、今回は基本的に人間の手で修正しないで

どうなるかを実験したとのこと。今のまま死蔵しているくらいなら、人手を最小限にし、利用する側も書誌内容は参考として、あとは画像で自分の求めるものは判断するという発想は、公立図書館からは出てこないでしょう。どうしても正しい書誌データ作成というのが基本姿勢なので…。しかし、今後、奥付情報に加え、AI（人口知能）を使うことよってデータの精度も上げられそうですし、将来、商用書誌データはさらに移行する可能性さえ感じました。

うお話に興味はわきますが、ルール作りが難しいという気がしました。そもそも地域資料には奥付もなく、背タイトルもないことがある現状を考えると実現は遠いのではないのでしょうか。ただ簡単に画像データが作成できるという魅力がありますし、そもそもデータの大きさが問題にならなくなってきたいますから、全ての書誌にもれなく画像データを付けるのが基本になる日が来ないともかぎりません。個人的には、いつか画像データを取ると自動的に、信頼できるレベルの書誌作成ができたら良いなあと能天気にかけてしまいました。

（あきる野市中央図書館）



その撮影の早さにビックリ！

湊山敦子

カーリル吉本講師の開発秘話、結城講師の過酷な（？）業務の中で今回の実験への前向きな取り組み、ブレインテックの書誌データ作成の検証、全て引き込まれる内容でした。

この事例をヒントに現行業務を発展させられることはないかを考えながら帰りました。仮に複数の図書館でISBNがない資料の3面（表紙・裏表紙・背）の書影をオープンブックカメラで撮影したとしても、書影画像データそのもので書誌の同定は困難です。撮影した文字画像をOCRで読み取る技術は書影の場合に限界があること、正しく読み取ったとしても書誌に落とし込む判断は、司書的AIが用意できたとしても、

奥付やページ情報などがないので難しいことは今回の実験からもよくわかりました。

ならば、落としどころを書誌作成と決めずに発想してみたらどうでしょう。業務の合理化には直接つながらなくても、3面の書影画像という情報を使って楽しいことができそうに思えてきました。OPACに表示される地域資料の書誌情報に背を含む3面の書影が表示されたならば、資料のイメージが深まるかもしれませんし、図書館員も探索の参考になるかも…などと想像が膨らむのでした。

何と言っても、驚いたことにオープンブックカメラは撮影速度が速いのです。既定の位置に本を置くだけで瞬時（吉本講師は2〜4秒とおっしゃっていました）にデータが出来上がるのです。体験すると簡単で

すし、面白いです。

例えば、書誌とは結びつけなくてもこの利便性を活かして、展示コーナーなどに図書群を配架する前に、オープンブックカメラで対象の図書画像をささつと撮影しておいて、貸出後もバーチャルで展示の概要を表示するなんていうこともできそうな気がします。

背と裏表紙を含めた3面の書影は、本の装丁を捉える視点でも楽しめます。権利問題等諸々超えるべき課題はありそうですが、きっとオープンブックカメラが活きる日が来ると感じています。手触りや重みや匂いなどは現物に触れなければ感じられませんが、デジタルならではの面白さも利用価値もあるはずだと思います。

参加させていただけたことに感謝します。

(西東京市図書館)

**多摩デポブックレット
最新号(第13号)
をお届けします!**

新刊の多摩デポブックレット 第13号は、一級建築士で寺田大塚小林計画同人・代表取締役の寺田芳朗さんのご講演を基に、『図書館計画で書庫はどう考えたらいいか? —いくつかの街の図書館づくりに参加して学んだこと—』のタイトルで発行しました。

3月31日に発行できたので、少し遅くなりましたが会員の皆さんには、2019年度総会議案書に同封してお届けします。

多摩デポ講座では、「多摩デポ」の事業とこの会に集まってこられる方にとって、直接的間接的に知恵を授けていただける各分野の先行者にお話をうかがうことになっているのですが、図書

館・出版関係以外の専門職——今回は、建築士さん——の方のお話を伺うのは珍しいことです。それだけに当日は非会員の方の参加も多く、専門職同士の交流の場ともなりました。

寺田さんは、多摩市立図書館本館の基本構想、及び基本計画策定にも関わられ、豊富な実績をお持ちです。惹きつけられるのは、図書館自体の役割について深い関心を持って、その街の将来の発展を見据えた設計を、行政の建築担当部署の職員だけでなく、そこに働く司書とともに考えていこうとする姿勢です。基本構想や基本計画・基本設計に直接関われる司書は限られているので、ともすると、設計の持つ意味に考えを巡らすことなく、使い勝手をあれこれ言ってしまうがちですが、寺田さんのような方と一から図書館建設に関わる

ことができれば、建物にも愛着が深まり、自信を持って図書館業務に携わることができると思います。

また、最後に少し多くのページをあてている「図書館計画と、建築の法律と、運用の安全(危機管理)」の章は、現在図書館で働く全ての方に、是非是非読んで毎日の仕事に今日から役立っていたいただきたいところです。もちろん、これから図書館で働こうとする方にもオススメです。

多摩デポ事務所へメール等で直接追加注文をしていただくこともできます。

名著だと紹介された『公共図書館』佐藤仁、西川馨著(井上書院 1974年)は今もって示唆に富みます。都内では、まだ多くの館で所蔵している、こちらの併せてどうぞ。



**多摩デポの活動を
支える会費納入と
ご寄付をよろしく**

同封の議案書6ページの「2018年度活動計算書(案)」をじっくりご覧いただけましたでしょうか。

20万円以上の黒字となつていますが、昨年暮れには明らかに赤字となる予測でした。しかし年度末に想定外の大口ご寄付をいただき、何とか黒字に転換することができました。この財政難の状況が今後も続くことは十分考えられます。

これまでの事務所・HPの維持と講座開催や(株)カーリルとの研究活動、多摩デポ通信や多摩デポブックレットの発行などの活動は、もともと「会費・ご寄付、ブックレット販売や講座などの事業収入だけでは経費を賄えていません。実は、

「多摩デポ」発足時に前身の「多摩むすび」から多額の資金を受け継いだことによつて成り立ってきたのだともいえます。

その資金をほぼ使い切つた事態を受け、「2019年度予算書(案)」作成にあつては、理事会・事務局で議論を重ねてきました。

2019年には郵送料や振込手数料をはじめ、諸経費の値上げが続いています。これまで同様の事業を継続していくためには、会費の値上げ、もしくは振込手数料を本人に負担してもらうなどの対応が必要ではないかという意見もありました。しかし会費の値上げを提案する前に、会員の皆様に財政がひつ迫してきている実情を丁寧に説明することが必要ではないかという点と、今年度については会費値上げは見送り、経費の一層の縮減に努めるとも

に事業収入増や寄付金・助成金獲得等に努めようということになりました。

とはいえ、現在の正会員数で事業を維持しようとすれば、一人当たり7千円程度の負担が必要です。既に今年度以降発行するブックレットは本体価格を800円に値上げすることも決定しました(会員の皆様には引き続き無料配布)。

そこで、会員を中心とした皆様へのお願いです。会費納入の際、正会員の方には「ご寄付を、賛助会員の方には、二口以上の納入をぜひお願いいたします。

諸事値上げのこの時期、何かと出費も重なることとは思いますが、どうぞご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

※ゆうちょ銀行の振込手数料が大幅値上げになりました

た。ご自分でゆうちょ口座をお持ちの方は「月1回の手数料無料枠」を使っていただけると助かります。また、お近くの事務局員に直接お渡しくださるのも歓迎です。

★会の現勢

2019年4月1日

現在

●正会員

(個人会員80名)

(団体会員2団体)

●賛助会員

(個人46名)

(団体1団体)

●年会費

正会員(個人・団体) 五千元

賛助会員一口 二千元

(個人一口 団体五口以上)

振込票を同封しました。どうぞよろしくお願いいたします。